

## 43

「ありのままに」正直に書きたいのですが  
可能でしょうか？

● 難しいですが、できた暁には素晴らしい社史となるかもしれません。

今日では、会社は社会の一員であり、情報の公開についてフェアであるべきだという考え方が一般的です。その立場からは、書きにくいこと（不祥事など）も公正に記したほうがよいというのが正論ですが、不祥事に類することは、記述することによっていたずらに関係者を傷つけたり、追いつち的な制裁となってしまう可能性もあって、書くのが正しいことだとも言いきれません。さまざまな政治的判断で、書くべきでないこととされることもあるでしょう。書きにくいこと<sup>①</sup> についての立場を整理すると、おおむね次のようになります。

① 扱わない

② 結果（〇〇退任、〇〇工場操業停止などの客観的事実）だけを述べて、

背景・経緯などの詳しい内容説明は避ける

③ 当時マスコミなどに対外発表した内容を、そのまま載せる

④ 現在の視点で再評価を行い、これを新たな「公式見解」として記述する

⑤ 事実をありのままストレートに記述する

このようななかで、書きたくないことにも勇気を出して挑戦した例はあります。

● 流通業五〇年史(元会長のコラム)／ある元幹部の職権乱用について。「めでたい社史に、このような話はふさわしくないという気持ちもありますが、四〇年を経た現在、私の心の中で決して風化することのない苦々しい記憶を事実のまま述べて、社員の皆さんが五〇年という歴史の正しい認識とこれからの教訓としていただければ幸いです」との理由であえて記述。

● 海運業五〇年史(本文)／発刊の一〇年ほど前、ある部門の人員を約半数に削減する事態に立ち至った。「……従業員の気持ちを思うと今でも心の痛むところである。当社の歴史に貢献してきた従業員であり十分の敬意を表した扱いとできる限り各人の立場を尊重することを原則とし……再出発に際してもできるだけだけの便宜と支援を心掛けた。その後(大量に離職者を引き受けた会社が数社あったこともあり・編者注)離職者全員の動向調査をしたところ、一名の例外もなくそれぞれ新しい職場に馴染みつつあることが判明し安堵したことも付記しておく」と一ページ以上を費やしてこの痛恨の出来事を記述しておられます。

右の例のように、あえて書くことで歴史の記録としてより充実したものでできたり、会社の考え方を表現したりすることもできます。思いきって正直に書くことを経営陣に進言されるのも、担当者の任務かもしれません。